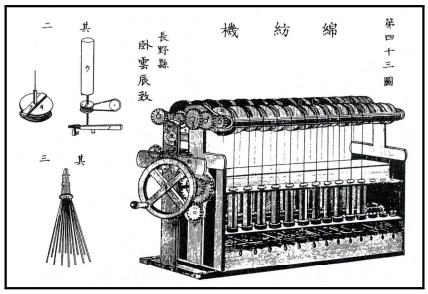
ガラガラと川沿いに、街中に響く音

ー ガラ紡工場 ー

■ガラガラと響きわたる音

ガラ紡機はその音に特徴を持つ。ガラガラと独特な音が工場内だけでなく、川面にまた道路端にまで響いている。ガラ紡機は和紡（わぼう）機とも呼ばれるが、一般にはその音を冠してガラ紡機と称されてきた。これはまた世界に類のない日本独創の紡績機械でもある。



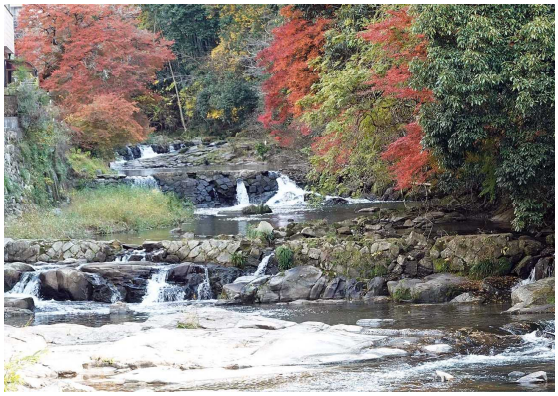
第1回内国勧業博覧会出品のガラ紡機
（『第1回内国勧業博覧会同出品解説』より）

綿から糸にするには、長さ25mm前後の綿の繊維を束ね、引き延ばしながら撚（よ）りをかける。江戸時代には一般的だった糸車による1錘（すい）ずつの紡糸から、一気に何十本、数百本の糸を紡ぐ機械の出現はまさに革命的であった。1877（明治10）年の第1回内国勧業博覧会において「本会第一の好発明」と評価され、一躍全国に知られたのも必然であった。それを最初に導入したのが、現岡崎市の山間（やまあい）であった。

当時稼働中のガラ紡工場（豊田市大内町 2000.4 筆者撮影）

■独特な風合いの綿糸づくりを担ったガラ紡工場

ガラ紡機の動力は当初は水車であった。そのため小河川沿いにはガラ紡工場が林立する状況が生まれた。戦後の最盛期には矢作川（やはぎがわ）支流の川沿いを中心に、1000を超す粗壁（あらかべ）づくりのガラ紡工場があった。水車へ水を引き入れるための小堰堤（えんてい）が段々となっている川筋もある。ガラ紡が栄えた地域を記す風景の一つである。地場産業として栄えたガラ紡も、洋式紡績の戦後回復とともに急速に衰退の道を歩んでいく。しかし近年その独特な糸質からくる風合いの良さが見直され、肌にも優しい織物として人気を呼んでいる。



川筋に段々となったガラ紡水車用の小堰堤跡
（岡崎市滝町 2023.11 筆者撮影）

2000年当時、稼働中のガラ紡機
（豊田市大内町 2000.4 筆者撮影）

■産業遺産として保存されたガラ紡機

そうはいっても、ガラ紡工場は幻ともなりつつもある。ガラガラと響き渡る独特な音は、昭和を懐かしむ音ともなり、かつての産地岡崎や豊田など西三河地域で聞くことは皆無に近い状態となった。代わりに、歴史的機械との評価が高まって、博物館などに収蔵が進められてきた。

ガラ紡機もそうだが、機械は動くことに意味がある。動かなければ機械ではない。その意味で、ガラ紡機が動態展示されるところが県内にはある。トヨタ産業技術記念館、愛知大学豊橋校舎などに展示のガラ紡機である。ここでは今もガラガラと独特な音を立てて糸を紡ぐ姿が見られている。

愛知大学豊橋校舎の「産業館」で動態展示されるガラ紡機（左）、合糸機（右）、撚糸機（中）の3台（2021.7 筆者撮影）

（天野武弘）